

平成 29 年度青少年「平和と交流」支援事業 ヒロシマ平和セミナー 平和首長会議プログラム レポート

相模原市総務局渉外部渉外課 主事 佐々木 保史

1 研修で学んだこと

本市では、毎年「市民平和のつどい」として、講演会や原爆・被爆に関する資料展示、平和ポスターコンテストなどを実施しています。平和事業の推進にあたっては、若年層の参加促進が大きな課題であり、この解決の手がかりを探すこと、また平和事業を担当する職員として、実際に広島で被爆者の思いや被爆の実相への理解を深めたいと考え、プログラムに参加しました。

今回のプログラムを通じて学んだこと等についてですが、まず、平和記念公園を訪れて第一に感じたことは、公園周辺をジョギングする人、散歩する人、自転車で通過する人など公園の存在自体が広島市民の日常生活に溶け込んでいるということでした。直接的に戦争の被害がなかった地域と核兵器の被害を受けた広島市における平和に対する意識の差がある理由については、こうした恒久平和を記念する公園を身近に感じながら生活していることも要因の一つではないかと感じました。

また、平和記念資料館では、初めに被爆する前の賑やかな広島の街と核兵器により破壊された街の様子が大きな写真で展示されており、そこを進む中で自分がその場に立っているような感覚で、改めて核兵器により失われたものの大きさを考えさせられました。大人でも目を背けたくくなるようなものが展示される中、子供からお年寄りまで、また外国の方が熱心に見学している姿が印象的でした。

次に、被爆体験証言の聴講では、さつまいものつるを食べていたこと、疎開っ子といじめを受けたこと、被爆した翌日はおにぎりを食べる食欲もなかったこと、1ヶ月間も下痢や高熱が続いたことなど、多くのことを教えていただきました。その中で特に印象に残っていることが、2つあります。1つ目は、4歳の時に被爆をしたため、証言を始める際、親に当時の様子を聞いても、話したがらなかったということです。思い出したくないほどに壮絶な様子だったことが容易に想像できました。2つ目は、証言者のお孫さんが死産だった時に、被爆2世であることが原因ではないかと疑われたことがあったということです。被爆という言葉が家族まで影響する辛さ、また、どこまで影響があるのか分からない被爆の恐ろしさがあることを知りました。証言者が少なくなるのが危惧されている中、とても貴重な話を聞くことができました。

将来に渡って平和に関心を持ち続けてもらうためには、単に若年層の参加者数を意識するのではなく、地道に平和や戦争について考える場等を提供していくことが一番大切なことではないかと考えました。今後、平和事業の担当職員として、今回のプログラムで学んだこと、感じたことを活かしていきたいと思います。